

7月27日（日）マルコの福音書11章20，21節

「先生、ご覧ください。あなたがのろわれた、いちじくの木が枯れています。」

---

夕方イエスと弟子たちは都の外に出て、翌朝早く彼らを通りがかりにいちじくの木を見ますと、あのいちじくの木が根元から枯れていました。（20節）ペテロは、イエス様が言われた「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように。」（14節）とのことばを思い出しました。そして驚きをもって「先生。ご覧ください。あなたがのろわれた、いちじくの木が枯れています。」と言いました。恐らく、ここでペテロはイエス様が14節で言われたことばは、のろい、すなわちさばきと理解したのでしょう。そして、これはまさにイエスのエルサレムに対するさばきの宣言だったのです。つまり、イエス様がわたしの家と呼ばれた宮を強盗の巣にし、そのことを決して悔い改めようとしないところに主のさばきが下りました。エルサレム神殿は、紀元70年に石までも崩れるかたちで、完全に破壊されることとなりました。

主のみことばは必ず実現します。主のさばきのことばも必ず実現するという意味では主は侮られるべきお方ではありません。その一方で、主の希望のことばも必ず実現しますから、私たちは苦難の中にあっても決して希望を失うことなく、信仰をもって歩まなければなりません。主の語られたことは必ず成就するのです。

7月28日(月) マルコの福音書11章22～26

「あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」(24節)

昨日見ましたように、根元から枯れているいちじくの木を見て、「先生。ご覧なさい。あなたののろわれたいちじくの木が枯れました。」とペテロが言ったのに対してイエス様は、「神を信じなさい。」と言われました。まさに根元から枯れたいちじくの木のように滅ぼされようとしているエルサレムにあって弟子たちに求められていたことは、神を信じることでした。さらにイエス様は「この山に向かい、『立ち上がって、海に入れ。』と言い、心の中で疑わずに、自分の言ったとおりになると信じる者には、そのとおりになります。」と言われたこともまた弟子たちには驚きだったことでしょう。山が動いて海に入るなどということは誰が考えても不可能ですし、馬鹿げていると思います。実際に、山が動くということは不可能の例えとしてユダヤ人の間で語られていたと言われていています。しかし人には100%不可能と思えることでも神にはできると信じるのが信仰だということであり、それが神を信じることなのだといイエス様はここで言おうとされたのでしょうか。そして、その神への信仰を現す手段が祈りであり、祈りを通して私たちは山が動いて海に入るような驚くべきみわざを期待し、見ることができるのです。それでイエス様は「祈って求めるものは何でもすでに受けたと信じなさい。そうすればそのとおりになります。」(24節)と言われました。ある人々は、このみことばから何でもとにかく熱心に祈れば、神はその祈りを聞いてくださると言いますが、私は何でもとは思いません。むしろ他のみことばと考え合わせるなら、神のみこころになかったことを祈りによって熱心に求めるなら、神はその祈りに答えてくださると信じることができます。そのために私たちはイエス様ご自身が、常に父なる神様のみこころをうかがい、それに従い通しておられたお方であることを決して忘れてはなりません。

さらに祈りが聞かれるもう一つの条件として、イエス様は「また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいます。」と言われました。つまり神様や回りの人と正しい関係を保っていないければ、力ある祈り、聞かれる祈りをするのができないということです。そのように、条件を無視してただ祈るのであれば、それは口先だけの空しい祈りになってしまう可能性があります。私たちは日々聞かれる祈りを主におささげしているのでしょうか。

イエス様が、なぜここでこのようなことを言われたのだろうかと考えた時に、一つ教えられたことは、墮落して、まさに主の家である宮を強盗の巣にし、イエスを十字架につけて殺してしまうようなエルサレムにあって弟子たちは、主のみこころに従った歩みをし、誰かに対する恨みごとを赦してやることで、神との正しい関係を保ち続け、その中で信仰による祈りの手を上げ続けることを求められたのだらうと思われました。私たちも罪の世にあって、また人々が不信仰へと傾く時代にあっても、なお私たちは主への信仰を持ち続けたいと願われます。

7月29日（火）マルコの福音書11章27～33節

「するとイエスは彼らに言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」（33節）

---

祭司長、律法学者、長老と言われているユダヤ教の最高議会を構成する三階級の代表者たちがイエス様のもとに来て、「何の権威によってこれらのことをしているのですか。」と尋ねます。これらのこととは、宮から商売人を追い出したり、これまで宮でイエス様が教えられたり、人を癒したことなどを指していると思われます。それを誰の権威によってしているのかと尋ねていて、それを言い替えるかたちで「だれがあなたに、これらのことをする権威を授けたのですか。」と尋ねます。つまり、祭司や律法学者などのように、イエス様が何らかの公的な権威をもって、宮で何らかの活動をしたり、教えたりしているとは思えないということでした。

それに対してイエス様は「わたしも一言尋ねましょう。それに答えなさい。そうしたら、何の権威によってこれらのことをしているのか、わたしも言いましょ。」と言われ、「ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、それとも人から出たのですか。わたしに答えなさい。」と言われました。その質問で彼らは窮地に陥ってしまいました。というのは、もし彼らが「天から」と答えたなら、それならなぜ、彼を信じなかったのかと言われます。また反対に人からと言え、ヨハネは確かに預言者だと思っていた群衆と真っ向から対立することになります。群衆ですら、ヨハネを神からの預言者だと認めていたのですから、祭司長、律法学者、長老たちがヨハネを預言者だと認められないはずはありません。結局彼らは自分たちの基準に従わないで自由に行動し、人々の人気を集めていたヨハネを預言者と認めたくなっただけの話だったのです。そしてヨハネと同様に、人からの権威ではなく神の権威をもって行動していたイエス様をも彼らは受け入れることができなかつたのです。さらに彼らは群衆を恐れたことによって、自分たちが真理に生きていなかったこと、そして人の顔色ばかりをうかがって何の権威もないことが明らかになったのです。

それで彼らはどう答えていいかわからず「分りません。」と答えました。結局、イエス様に痛いところをつかれたので、そこから逃げようとしたのです。それに対してイエス様は「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに言いません。」と言われたのです。つまり何を言っても信じようとしないので、言ってもむだだから話さないと話すことを拒否されたのです。私たちがみことばを通して痛いところをつかれることがあります。それに対して私たちが無視をしたり、言い訳をしたり、「わかりません。」と逃げようとする場合があります。イエス様に対してそのような不誠実な態度を取り続けるなら、私たちに對してもイエス様も「話すまい」と言われるでしょう。すべてをご存知のイエス様の前に、自分の弱さ、誤り、罪を素直に認めて悔い改めることのできる者となりましょう。

7月30日（水）マルコの福音書12章1～12節

「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。これは主のなさったこと。私たちの目には、不思議なことだ。」（10、11節）

---

ここで語られたさばきに関するたとえ話は、当時の宗教指導者に向けられたもので、（1節）彼らもすぐにそのことに気がついたようです。（12節）神は良い実を实らせるために、垣根を巡らし、踏み場を掘り、見張りやぐらを建てました。このことはあらゆる条件を整えられた神の恵み深さを表しています。それを農夫たち（指導者たち）に貸して、旅に出ました。そのように農夫たちにすべてをゆだねるほどに信用していたのです。

ところが収穫の分け前を受け取りに、しもべを遣わすと、「そのしもべを捕えて打ちたたき、何も持たせないで送り帰すような仕打ちをしました。それが何度も繰り返されたのですが、「その頭を殴り、辱めた」（4節）「多くのしもべを遣わしたが、打ちたたいたり、殺したりした」と、だんだんエスカレートしていることが分ります。神様は、忍耐をもって指導者たちが悔い改めるのを待っていましたが、決して彼らが悔い改めることはありませんでした。そして神は、わたしの息子なら敬ってくれるだろうとの思いをもって、愛する息子を遣わしました。悪人と知った上で、息子を遣わすという、考えられないほどの善意と忍耐を示されたのです。しかし最後に息子を遣わした時に、彼らは「あれはあと取りだ。さあ、あれを殺そうではないか。そうすれば、財産はこちらのものだ。」と話し合い、その息子を殺してしまい、ぶどう園の外に投げ捨ててしまいました。これは、この後のイエス様の十字架の死を暗示しています。彼らは、もはや管理者ではなく、自分が主人になろうとしたのです。ここに人の貪欲で傲慢な罪の性質があるのです。まさに、その罪こそがキリストを十字架につけたのです。

あと取り息子を殺してしまうなら、すべては自分たちの思いのままになるだろうとの考えは完全な計算違いでした。9節ですが、主人がやって来て、農夫たちをさばくために殺し、ぶどう園を他の人たち、すなわちユダヤ人だけではなく、ぶどう園の主人を敬うすべての人に与えられます。

10、11節は詩篇118篇22、23節の引用です。「次の聖書のことばを読んだことがないのですか」というのは、祭司長たちや律法学者たち、長老たもも、この詩篇を有名なメシヤ詩として必ず読んだことがあるはずだということを言おうとしています。「家を建てる者」とは、ユダヤ人の指導者たちで「捨てた石」とはイエスキリストのことです。つまり、ユダヤ人の捨てた石であるキリストを要の石として、主の教会は建てられ、そして来たるべき御国の要の石もイエス様ご自身であり、イエス様に対する信仰告白が、その要の石だということです。そして、このことを神はみこころとされたのですが、まさに十字架につけられたキリストこそが、まことの救い主ということも、人の目には不思議なことであり、ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人には愚かに見えるのです。

12節で彼らは、「このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいたので、イエスを捕らえようとしたのですが、彼らは「恐れました。」自分たちが罪を犯すことを恐れたのでもありません。御子であるキリストを殺すことを恐れたのでもありません。彼らは自分たちを滅ぼすことのできる神を恐れず、ただ群衆を恐れたのです。そして群衆が自分たちから離れていくことで、自分たちが持っていると思っていたぶどう園を失うことを恐れたのです。私たちは本当に恐れるべきお方である神ご自身を恐れているのでしょうか。

7月31日(木) マルコの福音書12章13～17節

「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」(17節)

---

祭司長たち、律法学者たち、長老たちは、イエスを捕えようとしたが、群衆を恐れて、それができませんでしたので、(12節) 今度はわなにかけ、何か問題になるようなことを言わせ、そのことばじりをとらえて皆が納得するかたちでイエスを捕えるために、ヘロデ党とパリサイ人の数人がイエスのところに遣わされました。彼らは、最初にあいさつ代りにイエスに対して「先生」と呼びかけ、「私たちは、あなたが真実な方で、だれにも遠慮しない方だと知っています。人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。」と言いますが、本心から言っているとは思えず、恐らくイエス様に対してへつらっているのでしょうか。次に彼らはイエスに対して、「カエサルに税金を納めることは律法にかなっているのでしょうか。いないことでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないのでしょうか。」(14節)と尋ねます。ここで言われている税金とは、紀元6年にクレニオがシリヤの総督として赴任してから、人口調査を行うことにより人々に課した人頭税です。この政策に反対してガリラヤ人のユダが、このような税金を納めることは奴隷にも等しいので、独立のために戦うよう人々に訴えて革命を起こしました。それと同様に、もしイエスが、カイザルに税を納めるべきだと言うなら、ローマ帝国からの支配を快く思っていないユダヤ人からの反感を買うことになり、納めるべきではないと言えば、ローマ帝国への反逆罪として訴えられることになります。イエス様に対するへつらいの言葉や言葉尻をとらえる目的のために、このような質問をする彼らの欺瞞をイエス様は見抜いておられました。「なぜわたしを試すのですか」と言われましたが、この試すという言葉は、1章13節のサタンの試みと同じ言葉です。イエス様は、ここにもサタンの試みと同じものを感じたのかもしれませんが。そしてデナリ銀貨を持って来るように言われ、「これは、だれの肖像と銘ですか」と尋ねられ、「カエサルのです」と答えさせると、「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に返しなさい。」と言われました。イエスが言おうとされたのは、例えばユダヤ人たちの中でもパリサイ人やヘロデ党の人たちのように、ローマの銀貨を持ち歩き、その統治を認めている者は、税金というかたちでカエサルに納めることで、その分を統治者であるカエサルに返せばいいし、神を信じ、神にのみ従うことを決心した者については、すべてのことにまさって神を最優先にすべきであることを教えたのです。すなわちイエスはローマ帝国の統治や税金を納めることの是非については一切語らず、ただ自分の信仰において決めたとおりに行うようにと言われたのです。

クリスチャンは、御国に属する民であると同時に、地上においては証しとして良き市民であるべきです。それは、神によって立てられた「上に立つ権威」(ローマ人への手紙13章1節)に従うことを意味しています。しかし信仰が妨げられようとする場合には、権力に抵抗することも必要です。すべてのことにおいて私たちは神が最優先されなければならないからです。

8月1日（金）マルコの福音書12章18～27節

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」（27節）

ここで復活はないと主張するサドカイ派の人々がイエス様のところへ来て質問をしました。サドカイ派は、ユダヤの最高議会（サンヘドリン）の大半を占める会派でした。彼らはモーセの律法だけを認め、どんな教理や伝承も律法に明記されていない限り否定する立場でした。彼らに言わせれば、「復活」ということはモーセの律法には明白に教えられていないので、「復活はないと主張していたサドカイ派」ということになったわけです。

サドカイ人たちは、申命記25章5～10節を持ち出してイエス様に質問しました。申命記25章5節に「兄弟と一緒に住んでいて、そのうちの一人が死に、彼に息子がいない場合、死んだ者の妻は家族以外のほかの男に嫁いではいけません。その夫の兄弟がその女のところに入り、これを妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。」とあり、6節には、その目的として「彼女が産む最初の男子が、死んだ兄弟の名を継ぎ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければなりません」と言われています。これは、いわゆるレビラート婚と呼ばれるもので、家が断絶しないようにとの配慮からできた制度です。この規定に基づいて、恐らくは誇張したかたちで、彼らは長男から始まって、次々と子を残さないで死んだので、七男にまで嫁ぎ、七人とも子を残さぬまま、最後にその女性も死んだ場合のことで持ち出しました。そしてもし復活があるとしたら、「復活の際、彼らがよみがえるとき、その女はだれの妻なのでしょう。七人ともその女を妻にしたのですが。」と尋ねます。サドカイ人たちは、もし復活があるならば、夫婦であった男女ともに復活するのを待たばいいわけで、次々と兄弟間で再婚するのはおかしいと思ったのでしょうか。さらに、もし復活があるとすれば、「その名がイスラエルから消し去られないようにしなければなりません」というような、地上での地位や財産を重視する規定は意味がないとも考えたのでしょうか。

それに対してイエス様はまず「あなたがたは、聖書も神の力も知らないで、そのために思い違いをしているのではありませんか。」と言います。冒頭でも申しましたが、サドカイ派の人々は、モーセの律法しか信じていなかったもので、預言者や詩篇などに預言されていた復活の教えを知らなかったのでしょうか。私たちも常に聖書全体を読み、聖書全体から解釈しなければ、真理から迷い出てしまうことがあるので気をつけなければなりません。また「死人の中からよみがえるときには、人はめとることも嫁ぐこともなく、天の御使いたちのようです。」（25節）と言われました。復活の時には、結婚も出産も死もないのです。したがって、そのような地上的な意味での家族構成ありません。全員が神の子であり、一人一人が父子として直接神に結びつけられるのです。ヨハネの黙示録22章3、4節には「もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。」とあります。もちろん私たちは、夫や妻、親や子をも互に見ますが、むしろ御国において強調されているのは、神に仕え、御顔を仰ぎ見る、神と私たちとの関係です。

イエス様は出エジプト記3章6節の「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」を引用して、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です。」と言われました。出エジプト記3章6節では、アブラハム、イサク、ヤコブの過去の人物に対して「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神でした。」と過去形で言われたのではなく、「神である。」と現在も神だと言われています。つまり信仰のゆえに神との交わりの中に入れられている者たちは、神が生きておられるがゆえに生きている者たちであり、神は永遠から永遠まで存在されているので、神を信じる者もまた永遠に存在するのです。復活はまさに神が生きておられることと、神の御力の現われなのです。

8月2日(土) マルコの福音書12章28～34節

『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。(30、31節)

---

律法学者の一人が来て、イエスに「すべての中で、どれが第一の戒めですか。」と尋ねました。それに対してイエス様は、「第一の戒めはこれです。」と言われて、まず「聞け、イエスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」と言われました。これは申命記6章4、5節の引用ですが、文法的に言えばイエス様は主を継続的に愛し続けることを求めておられます。特に「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして」ということで、自分の持てるすべてのものをもって主を愛することが求められているのであって、決して心が伴わない口先だけの愛を主なる神様は求めておられません。それと同時に第二の戒めとして「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」と言われました。主を愛することと隣人を愛することとは密接につながっています。つまり、主を愛する者は、それが目に見える隣人への愛に必ず現れるからです。「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は兄弟も愛すべきです。」(ヨハネの手紙第一4章20、21節参照)とあるとおりです。このようにイエス様は、主を愛することと隣人を愛することについて、「これよりも重要な命令は、ほかにありません。」と言われました。

32節で律法学者は、「先生、そのとおりです。～まさにそのとおりです」と同意をするとともに、律法学者らしく、すかさず「心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛すること、また、隣人を自分自身のように愛することは、どんな全焼のささげ物やいけにえよりもはるかにすぐれています。」と答えます。これは、旧約聖書のサムエル記第一15章22節やホセア書6章6節をもとにして答えているのだろうと思われます。それに対して、34節で「イエスは彼が賢く答えたのを見て言われた」とありますように、彼の答えが賢い答えであることはイエス様も認めつつ、「あなたは神の国から遠くない」と言われました。このイエス様のことばについては、この律法学者を称賛されているなどの様々な解釈が提示されています。その中で妥当な解釈としては、この律法学者は、イエス様を正しく認識すること、すなわちイエス様を神の御子、救い主として受け入れさえすれば、彼は神の国に入ることができるのにとという意味で、「あなたは神の国から遠くない」と言われたのでしょう。聖書や神学的知識が人を御国へと導くのではなく、イエス様に対する生きた信仰が御国へと導くことを思わされます。求道しておられる方もイエス様への信仰によって御国の民の一員とされますように祈りましょう。